

44.
MOSTRA

INTERNACIONAL DE CINEMA
SAO PAULO INT'L FILM FESTIVAL

私が覚えて
いること、
みんなが忘
れていくこ
と。
風が吹く。
隣人が弾く
ピアノの音。
ジンと鳴った
自転車のベル。

静謐
と
夕暮



2022.1.8 土 - 1.14 金

サンパウロ国際映画祭正式上映作品

せいひつ
記憶を辿る、静謐な136分の旅。

監督・脚本・撮影・音楽:梅村和史/主演・制作・美術:山本真莉/プロデューサー:録音・編集:唯野浩平/出演:入江崇史、延岡圭悟、石田武久、長谷川千紗、仲街よみ、和田昂士、野間清史、ゆもとちえみ、梶原一真、赤松陽生、吉田鼓太良、南野佳嗣、鈴木一博、栗原翔、石田健太、福岡芳穂、岡本大地(2020年/日本/136min/カラー/DOP/1.85:1/5.1ch)

今日から明日への変化は、いつもささやかです。同じような悩みを抱え、同じようなご飯を食べ、同じような景色に囲まれ、ほとんどの日は過ぎていきます。たまに大きな変化があっても、日々の暮らしはそれを取り込み、やがて地ならしされてしまいます。

静謐と夕暮は、そんな平坦な日々にある美しい環境感を、逃がさないよう、そととくいとるまに捉えていました。希望も絶望も、生も死も、あらゆるものが並列に、ある種の平等を持つてポツポツと画面に並んでいく。

自分が忘れてしまっても、この映画が大切なことを覚えてくれていている気がして、僕はなんだか救われた気がしました。

平然と道に迷ぎ、悠然と闊歩。周りは気づかない。こはしらない。拡がる視界に眼

色か融ける。泰然、でも落ちる夜、緊張、緊張しているし、まあ、めっちゃ不安、実際、静かな湖畔に指を立てる。波紋。

梅ちゃんはいつもいたい。橙色の服を着ていたのだった。

映画監督・川添彩

(こはしもた々大)

ゆるい覚悟で、なんとなく撮られたショットがどうしても一瞬の迷いや揺らぎさえなく、徹底して、静謐でありながら、しかし恐ろしいほどの熱量で、全篇が強靱な意志に貫かれている。その何たる切実さ、朝起き上がる活力も思いつく。ただひたすら何かか吉しい。そんな人たちに観てほしいと強く思った。どうしようもないほどに居なくなってしまうと思う日々、その淵に立っているまなこが、息ができるような時間が流れているからた。何かを理解しようとしても良くて、じつと見つめるだけでも良い。いつか、この映画で観た情景をふと思いつく、途方もない感動に包囲される日が必ずやってくる。

「静謐と夕暮」という傑作を、梅村和史という映画作家を、私たちが見逃す理由はない。

映画監督・工藤梨穂

チーフ・アドバイザー 梅村和史

「自分、生きてるなあ」と実感できる映画でした。傷ついたり目的を見失ったり居場所を無くしても、自分で自分を励ましたり自分に優しくできれば、生きるエネルギーが湧いてくる。映画が終わって立ち上がると、体内には温かいエネルギーが駆け巡っていました。

俳優・上川周作

チーフ・アドバイザー 梅村和史

丁寧に積み重ねた映像と丹念に拾い集めた音が静かに人の呼吸を際立たせる。一輪挿しの花のように孤独な人々を梅村監督は優しいショットで包み込んでゆく。スクリーンと対峙しながら、いろんな問答を自分と繰り返した。

長期熟成されたウイスキーを味わうように、深く記憶の余韻が広がる映画だ。

映画監督・白石和彌

(梅村和史)

まだ子供のころ、夏の夕方、5時半から6時半、空気が青く、水面は鏡のようにしずかで、私は「静謐と夕暮」のスクリーンでは、風はさわさわわわといって、扇風機は回る、電気が消える、キレイ、夜走る自転車、電車の窓の反射が橋脚に映る。他人に見られる、という自意識がないぶんさらばうな主人公の少女、過去を旅し、辺境の川原に、何もなかった。ただ、目が開かれて行く。主演の山本真莉の自意識のない瞳は、世界に名前のつく前の豊かな時間を垣間見せてくれる。詩のような時間を生きることができていた時間を。

映画監督・古厩智之

(ホムレと中學生のぼる小寺さん)



introduction

「凶悪」「彼女がその名を知らない鳥たち」「止められるか俺たちを」など数々の受賞作品を手がける映画監督、白石和彌に「長期熟成されたウイスキーを味わうように、深く記憶の余韻が広がる映画だ。」と評された梅村和史初長編監督作品。2020年度サンパウロ国際映画祭にて上映された。主人公・カゲを演じるのは新人の山本真莉。カゲが出会うキーパーソン・老人を演じるのは入江崇史。

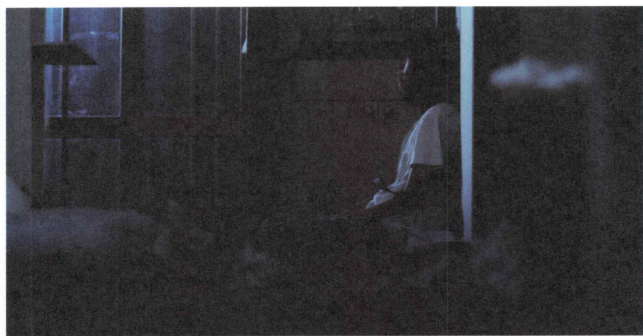
老人が手にする原稿に記された、紙面上に浮かぶ記憶のような内容を読み進んでいく本作。人生の一瞬にふと立ち止まった女性が、訪れた鉄橋の下で原稿を通して、失いかけていた時間とカゲの記憶に触れる。監督自身がカメラを据え、映し出される街や路地、森川辺、丘、そこに通り過ぎる夏の光と風一つ一つを丁寧にフレームに収めた。言葉では表せない息を呑む映像や音が夏の原風景を漂わせ、観客の記憶に囁きかける。

story

写真家の男が川辺を歩いていると、川のはとりで衰弱している老人に、何やら原稿の束を渡す女がいた。翌日、再び男がその場所に行ってみると、その原稿を読む人々がいる。その原稿には、渡した女の書いたものと思しき、この川辺の街での日常がしたためられている。

ある日、いつものように川辺にやってきた女は、見知らぬ黄色の自転車と川辺に座る男を見た。数日後、女が住むアパートの隣室にその川辺の男が越してきた。夜な夜な隣室から聞こえる、男が弾くらしきピアノを漏れ聞くうちに、その男の生熊が気になり、毎朝、黄色の自転車に乗って出ていく彼の後ろを追いかけることにした。

そんなある日隣室の男が失踪する。



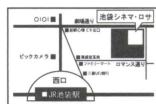
監督・脚本・撮影・音楽：梅村和史/主演・制作・美術：山本真莉/プロデューサー・録音・編集：唯野浩平/出演：山本真莉、入江崇史、延岡圭悟、石田武久、長谷川千紗、仲街よみ、和田昂士、野間清史、ゆもとちえみ、梶原一真、赤松陽生、吉田鼓太良、南野佳嗣、鈴木一博、栗原翔、石田健太、福岡芳穂、岡本大地(2020年/日本/136min/カラー/DCP/1.85:1/5.1ch)

2022.1.8 ± - 1.14 金 池袋シネマ・ロサ

池袋西口・ロサ会館

03-3986-3713

www.cinemasosa.net



前売券 1,300円
一般 1,500円
学生 1,300円
高校生以下 1,000円

Twitterはこち
ら、最新情報
更新してお
ります

